

「ことばの教育」に携わって思うこと

山本 新治

国際教育研究所副理事長

私立海城学園 相談役

元都立教育研究所統括指導主事

前実践女子大学非常勤講師

私は言語学者でも英語教育学者でもないが、これまで英語教育の実践に関わってきたものとして浅学であるが実践指導から得た私なりの英語教育における「ことばの教育」についての考えを述べることを会員の皆様にお許し願いたい。

私は都立豊学校の英語の教師としてその第一歩を始め、10年間艱難辛苦の学習支援を経験し、生徒との結びつきを通じた貴重なことばの教育の深さを学んだ。その後区立の新設校に異動した後、都教育庁、都立教育研究所、区立中校長、ニューヨーク補習授業校への文科省派遣教員として勤務し、帰国後は区立中での勤務を最後に退職。続いて三菱商事海外子女教育の相談室長として10年近く勤務、退職後は現在の海城学園の相談役として現在に至っている。この間、様々な機会を得て、北は北海道から南は奄美大島まで小中学校の英語の実践指導の諸機会を得た。さらに都教育庁、三菱商事の在職間に世界五大陸の30に余る諸都市を訪問し、日本の幼児児童生徒の教育相談に携わる貴重な経験をした。

表題に関わって、コミュニケーション能力の育成とは「ことばの環境整備」であろうと考えている。それは「コミュニケーション」は本来、物を運ぶ手段ではなく、心を運ぶ＝心を伝える＝心が通う ことそのものではないかと考えるからである。

神奈川県にある特別老人ホームでの試みを紹介する本を読んだ。「言葉遣いにも気配りを一温かいケアーは人間づくり、思いやりの一言から」と題する介護実践の記録である。

<例>

○相手の立場になって伝える

- ・「リンゴでいいですか」⇒「はい」「いいえ」しか言えないので、
⇒「果物は何にしましょうか」－お年寄りが希望を言えるようにする
- ・あっち向いてください、こっち向いてください

職員本位の言い方なので⇒「窓側を」「右側を」と具体的にお話をする

○禁止、否定語は使わない

「なんで電気をつけるの」⇒「電気を消してよろしいですか」

「何時までも寝ていてはダメでしょう」⇒

「顔を洗ってみんなでテレビでも見ませんか」

○不必要な指摘や、とがめ、愚痴、嫌味は言わない(セクハラになりかねない)

「体重増えたんじゃない」⇒「元気になってよかったね」

「また、トイレなの」⇒「出たくなったら言ってください」

「どうしていつも残すの」⇒「量が多すぎましたか」

○強要、強制的な言葉遣いはしない

「自分でやらないと動けなくなっちゃいますよ」⇒「リハビリと思ってやってみませんか」

このような介護実践の在り様は、私たちの社会、家庭、学校でも求められる内容と実感している。

最初に赴任した人権教育の中心校での実践的な教育目標として、「言葉の環境教育・環境整備」を設定した。その中で、「言葉は生活の風景である、と言われるように、人と人とを結びつけるのは言葉。人間関係の希薄化、一人遊び、個食化、等々、子供たちを取り巻く環境は必ずしもよいとは言えない中、少なくとも学校生活の中で言葉を基底とした人間関係の樹立を学校教育の基本として子供たちが身に付けられるように最善の努力をしていかなければならないと力説したことを覚えている。「たかがことば、されどことば」なのだからである。

斉藤 孝「コミュニケーション力」(岩波文庫)は、「コミュニケーションとは、意味と感情をやり取りする行為。言葉に感情を乗せ、相手の感情にも気を配る。エネルギーにあふれた反応いい身体と、文脈力のある知性。この二つがあれば万全だ。」と述べている。実に言い得て妙である。

国際教育研究所 規約「第三条 (目的)」として“本学会は国際的に活躍できる人を養成するための言語教育・国際文化教育の向上を目指し、研究・研修及びその推進

活動を行うことを目的とする。”と規定し、本年の総会のテーマを、「英語教育を通して人を育てる」としているのは、まことに時宜を得たテーマと考えている。

一方学校教育に目を転じると、今般の学習指導要領の改訂にあたっては、「生きる力」を育むことを目指し、基礎的・基本的な知識及び技能を習得させ、これらを活用して課題を解決するために必要な思考力、判断力、表現力等を育むとともに、主体的に学習に取り組む態度を養うため、「言語活動を充実する」こと、特に、思考力・判断力・表現力等をはぐくむ観点から、それぞれの教科等において【言語活動を充実する際の基本的な考え方や、言語の役割を踏まえた指導】について具体的な9教科の教科横断的学習支援事例を詳細に紹介している。

いまだ十分なまとまりを欠き、消化不良なままに本稿を終えることになるが、最後に胸中にある新聞記事を紹介する。

随分前の記事であるが、言語活動の重要性を指摘していた内容である。

“豊かな日本語で生きる力を” より

「...木と言う文字がある。二つ並んで林になる。三つ集まれば森になる。これは里山の生活だ。...赤ん坊はまっ白な頭で生まれ、言葉を覚えることにより知識を広げ、考えることを覚え、コミュニケーションを培い、自己を確立していく。
...言葉が豊かでなければ、どうして考えが豊かになるだろうか。
言葉が正確でなければ、どうして思考が正確になるだろうか。
...言葉の豊かさで生きる力を育んできたのである。とりわけ学校教育の現場では、国語科だけではなく、この視点が肝要、と私は思う。」

—作家・阿刀田 高一—

日本教育新聞 H.23.1.3

4月24日（土）第187回月例研究会報告

テーマ「変革と創造の時代を生きる子どもたちのために

小・中・高で求められること」

講師：池田勝久

文部科学省
初等中等教育局
教科書調査官

今、日本の教育はどこに向かおうとしているのだろうか。100年に一度の教育改革と叫ばれているが、新学習指導要領とGIGAスクール構想からその本質を考察してみたい。

教育界に目を向けてみると、大学入試改革、プログラミング教育、働き方改革等、次々と新しい施策が打ち出されているが、それらを統合的に有機的に連携しあった課題として理解する、つまりシステム全体の中で理解することが教育者として重要になってくる。

現在、日本が抱える最大の課題は若年人口の急激な減少と超高齢化社会であり、このような社会構造であっても、労働生産性を上げ、経済を活性化しなければならないことだ。

少ない労働力人口で生産性を高めるには、「生産性の高い人材育成」と「AI・ロボットとの共存」を図るしかない。前者は、世界で活躍するような人材を数パーセント育成するというのではなく、すべての日本人を地域やいろいろな場所で自分の良さを十分に発揮して世に尽くしていく人材にすることを意味している。このことは、昨今よく耳にする「個別最適化」とつながる。「主体的・対話的で深い学び」「英語4技能テスト」「記述式問題」「新しい評価（特に思考・判断・表現）」「STEM教育」「高校の新科目」「英語の言語活動」、これらの共通点である論理的に思考する力の育成を徹底的に行うことが、教育立国としての日本の新たな時代を切り開くことになるはずだ。このことを後押しする大きな原動力となるのが後者、言い換えると技術革新である。より効果的な学びの支援が生まれることで教育改革は確実に進むだろう。また、ICTやAIの助けを借りれば、困難さを抱えている子どもを救うだけでなく、子どもの可能性を大きく広げることが可能となる。

新しいことが次々と誕生する時代、価値観が著しく変わる時代を生きていく子どもたちのためにも、我々大人こそがアクティブラーナーとしてのモデルにならないのではないだろうか。

5月22日（土）第188回月例研究会報告

テーマ「英語教師が日本語作文を学生に教えてわかったこと」

Pre-writing worksheets を用いた Scaffolding の試み

講師：川崎 清

文京学院大学名誉教授

【0】はじめに

2021年5月22日（土）に2021年度第2回月例研究会があり、私は「英語教師が日本語作文を学生に教えてわかったこと」と題して実践報告をした。以下その内容を報告する。

【1】英語教師が日本語作文を学生に教えてわかったこと

「英語教師が日本語作文を学生に教えてわかったこと」とは、**instruction**（指導）と **scaffolding**（支援）との違いと後者の効果的な使い方である。

筆者は英語教師として授業では指導事項を学生に手際よく伝えようとしてきた。学生の実情に応じ様々な工夫を凝らしてである。だが振り返ってみれば、それはお教え込みの手法(**spoon-feeding**)による指導(**instruction**)であった。教師は調べてきたことを学生にぶちまけるから満足するのだが、学生は受け身なので、その時の気分で受け取れるものだけを持ち帰っていたにすぎない。このような指導であれば、「学び」で得るものはそれ程多くはなかったろうと今なら理解できる。教師が学生側に主体的、自律的に学ぶための精神的構えやスキルを身に付けさせる手立てを講じていないからである

今回、筆者が日本語作文を教えることになり、たまたま **scaffolding** という学習支援技法を知り、採用してみることにした。**Scaffolding**とは『学習者が独力でできる課題のレベルと支援者が支援すればできる課題のレベルとの間』(注1)に足場かけ(**scaffolding**)の支援をし、学習者に後者のレベルの課題に取り組ませ、その解決方法を会得させて、課題に一人で取り組んでも解決できる状態に近いところまで能力を高める学習支援』のことである。

今回の日本語作文指導では、**scaffolding**としてワークシートを使えないかと考え、工夫してみたのである。その内容については【4】【5】で詳述する。

【2】 指導対象学生の実態と指導時間数

指導対象は新入生 290 名である。その作文経験を調査すると、高校 3 年次に 800 字以上の作文を書いたことがある者は全体の約 4 割で、彼らは指定校推薦・公募推薦/AO 入試（現・学校推薦型選抜/総合型選抜）において提出書類の「志望理由書（800 字以内）」を書いた学生であった。残りの学生は 800 字の作文でさえ過去 1 年間に一度も書いていないとのことであった。また、今回の日本語作文の指導時間は「初年次教育」の前期 15 回分（1 回 90 分）のうち 5 回分を充てたものである。

【3】 指導内容と手順－その狙い

上記の学生に「何を書くか、どう書くか」のコツを身に付けてもらうために、以下の三つの課題を課した。まず最初は「自分史」を書く課題で、次がビブリオバトルにおいて使用する「推薦図書のおすすめ文」を書く課題である。三つめは直近三週間で目にした新聞記事やテレビ報道で気になった問題や出来事について「自分の意見を述べる文章（論説文）」を書く課題である。課題作文は全員がグループ内で自分の作品を読みあげて発表し、メンバーからその場で簡易ルーブリックに基づいて評価されることになっている。

課題を与える順序には次の意図があった。およそ文章を書くには、まずテーマに関する材料や情報を収集しなくてはならないが、自分史であれば自分のことなので、書く材料や情報は収集しやすいはずと考えて、まずは「自分史」を最初の課題としたのである。この課題で材料収集の練習をするとともに、文章は思いついたままを書くのではなく、一つのストーリーになるように材料を並べ、その構成を考えなければならないことを理解させる意図があったのである。

次に「推薦図書のおすすめ文」であるが、これは読書体験に限定した自分史ともいえるもので、材料や情報の収集について更に精度を上げた練習をすることができる。また推薦文であるから、推薦する理由を述べて読者（聴衆）を「説得する論理」を構築する必要があり、文章の論理性を考え工夫する練習を意図したのである。

この二つの課題をこなす経験を踏まえて、最後に「論説文」の執筆という課題に取り組みさせた。自分の意見を述べるには、いろいろと調査をして意見を支える根拠となる事実を収集しなければならない。どのような情報をどのように収集するのか、また、得た情報を自分の意見の根拠としてどのように配置し、論理としてどう組み立てるのかを練習させる意図があったのである。

【4】 指導で使うワークシートは指導の成否をわかる

上記三つの課題を指導するにあたり、それぞれワークシートを作成した。自分史については「忘れられない一日のこと」「尊敬する人物(家族以外)」「今までで最も熱中したこと」のうち一つをテーマとするよう指導した。そして AB2 枚のワークシートを使い、執筆のための材料を集めるよう指導したのである。ワークシート A には、学生が成育過程で体験した出来事について、その記憶を活性化する質問を並べてあり、学生は「影響を受けた人物」「影響を受けた出来事」「いつどこでその人や出来事に会ったのか」などの質問に答えていくのである。次にそのワークシート A に基づいて、ワークシート B では自分に影響を与えた人や出来事を振り返り、テーマを決めて、そのテーマを一つの物語としてとらえ、ア) 始まり、イ) 途中、ウ) 終わり、の 3 場面を想定し、始まり(出会い)は、いつ、どこで、どのように始まった(会った)のか、途中でどのようなことがあったのか、終わりは、いつ、どのように終わったのか、自分のものの見方はどのように変化したのかを書き出すように指導していくのである。この 2 枚のワークシートを使うことを通して学生は自分史に書く細かな材料の集め方やその材料の並べ方、すなわちストーリーの構成の仕方を大体会得して、自分史(1600 字以内)の執筆に臨んだのである。

次はビブリオバトルにおいて使用する「推薦図書のおすすめ文(800 字)」を書く課題だが、そのワークシートの作成には心血を注いだ。というのも、学生は小中高において、読書感想文を夏休みの宿題として課されており、それを書くのに大変苦勞していたので、学生が苦手意識や強い厭悪感を持つ課題だったからである。

ワークシートには感想文に書くべき情報を A~F の六つに分けて示し、それぞれに何字を充てて書くべきかの目安も同時に示した。

記述すべき情報を示すと以下ようになる。

- | |
|--|
| A 「私とこの本との出会い(いつ、どのような状況でこの本と出会ったか) (50 字) |
| B 「この本の内容をざっくりとまとめる。(短く 1、2 行でまとめる)」 (70 字) |
| C 「私が見つけたこの本の魅力(自分で面白いと思ったこと)をまとめる」 (250 字) |
| D 「最も印象に残ったことば(場面)を簡潔にまとめる」 (80 字) |
| E 「この本で自分は何が変わったか(どう強くなったか / どう励まされたか)」 200 字) |
| F 「この本を推薦する理由(誰に推薦するのか / なぜ推薦したいのか)」 (150 字) |

特に工夫した点は B の「この本の内容をざっくりとまとめる。(短く 1、2 行でまとめる)」(70 字)としたところである。この工夫は、学生たちが小中高校で書いてきたいわゆる読書感想文の悪い癖を断ち切るのが目的である。

学生たちのそれまでの読書感想文は、多くの場合、全体の5分の4が荒筋の紹介になり、最後の5分の1で「面白かった、感動した」等の型どおりの感想が一言二言述べられるものであった。本人がその本を読んで何を考え、自分の内面がどう変化したのかの記述がほとんどなく、感想文としては読者の人間像が伝わらない内容の乏しいものだったのである。

そこでワークシートには上記A～Fの視点から読書体験を振り返り、それぞれの情報をまとめさせたのである。その効果はかなりあったと思う。学生の書く推薦文には、表現の巧拙はあるものの、本を読んだ後の自分の精神的成長や変化が必ず記述され、他者に伝える情報が具体的になり、内容も豊かなものとなったからである。

次は「自分の意見を述べる文章」を書く課題であるが、これは次項において詳述する。

【5】「自分の意見を述べる文章（論説文）」として「なたもだ作文」を書く

「なたもだ作文」とは財団法人国語作文教育研究所長宮川俊彦氏の創案した作文指導法である。「なたもだ」とは、論説文作成の際、「～すべきである」等の問題提起文を述べた後に、どのように文章を続けて書けばよいのかを示す一種の呪文である。理由を表す「なぜなら」、事例を表す「たとえば」、仮定を表す「もし」、結論を導く「だから」の接続表現の最初のひらがなを四つ合わせて「なたもだ」としたものである。

接続表現は先行する文章の内容を受けて、後続文章の意味内容の方向性を予告することばである。それ故「なたもだ」を使用して文章を作成すると、文章の内容と論理の展開の順序があらかじめ示されているため、書き込むべき文内容を書き手が想起しやすくなり、文章を論理的に構造化することが容易になる。

学生の多くは「なたもだ作文」を知る前は、いま書いた文内容に対してその時の思いつきで接続表現を選び、その接続表現の意味に適合するように後続文章を綴っていたようである。そのやり方では論理展開の流れを事前にしっかり意識している場合は大丈夫だが、そうでない場合には、書く内容に揺れが出てしまい、論理展開の流れを作り出せなくなる。従って、いつまでたっても論理的文章を書けたという実感を持たないことになり、それが作文の苦手意識を産む原因にもなっていたようである。

しかし、この「なたもだ」を使用すると、述べるべき内容と順序があらかじめ示されており、次に何を書くべきか、その文内容を想起しやすいので、小・中・高校生は勿論、大学生でも、論説文作成の有益なツールとして役に立つのである。実際の指導では、この「なたもだ作文」の練習を「論文・レポートの書き方」に接続するように計画し、次の点を強調した。問題提起文を自分の意見として主張し、それに続く「なたもだ」の各部分では意見には必ず根拠を添えて文章を書くこと、すなわち「意見と根拠をセットで書く」習慣を

つけるよう学生に強調したのである。以下は学生に示した作例である。「なただ作文」について概略を理解できると思う。

キャンパス内は全面禁煙にすべきである。(問題提起文)

なぜなら、世界保健機関の報告にもあるように喫煙は健康に悪いからである。また、吸わない人の健康を損ねる喫煙をわざわざ公共スペースであるキャンパス内とする合理的理由もないと思われる。

たとえば、喫煙室で喫煙したとしても密閉されているわけではないので、タバコの煙は禁煙エリアに漏れ出てしまい、喫煙しない人の健康を損ねる可能性は高い。

もし、喫煙を全面禁止にするのは個人の自由の侵害にあたるという理由で全面禁煙に反対するのであれば、それは自由のはき違えである。喫煙したいのなら自室ですればよいのであり、わざわざ色々な人の集う公共スペースする必要はないはずである。

だから、公共スペースであるキャンパス内では全面禁煙にすべきである。大学は喫煙しない人の健康を守る義務があり、また同時に、喫煙者にも喫煙マナーを自覚させる必要があるからである。(390字)

「なただ作文」はまず400字のものを書くが、これに習熟した後に「なただ作文発展版」という1000字で書くものがある。「なただ作文発展版」とは、本稿筆者が編み出した論説文の文章作成法で、上記の「なただ作文」の基本形に、更に論理性と説得力を増強するレトリックを組み込んだ文章作成法を指す。論理性と説得力を増強するレトリックは以下のものである。

- 1) 理由を述べる際に、「第一に、第二に、第三に」と複数理由をあげる。
- 2) 自説に対する予想される反論をあらかじめ取り込み、それに再反論する。
「一方、～という考えもある。しかし、それは、間違いである。なぜなら…」
- 3) 論じている事柄に類似する事例を取り上げ、それとの比較、対照をする。
「類似の事例に～がある」

こうすれば、自説の論理は多角的、多面的に論じられ、説得力のある文章となる。この点を理解させるために、指導する上記のレトリックが全て使用されている例文を学生に配布し参考にさせた。(作例は紙面の都合で省略)

【5】 今回の日本語作文指導の効果について

まず本稿で紹介した作文指導が学生にとり効果があったかという点を見ておきたい。最終回の指導時にとった授業アンケートを見ると、「800字の作文を書くことに慣れましたか」の問いに「慣れた」と答えた者が37.1%、「まだ苦勞しているが書ける」とする者が50.5%、「書けるとは言えない状態である」とする者が10.3%であった。前二者の数字を足すと87.6%になり、九割弱の学生が「800字の作文ならどうにか書ける」と思えるところまで指導できたことになる。故に、この作文指導の効果はあったと考えている。

次に、作文はグループメンバー（自分を入れて5人）の前で読み上げる形で発表させていたが、そのことの効果を見ておこう。「クラスメイトの発表を聞いて見習うべき点がありましたか」という問いに、「たくさんあった」と答えた者が「なともだ作文発展版」の発表では、77.8%いた。物事に対する発表者の思考の深さや視点の鋭さに目を見張ると同時に、その落ち着いた物腰や態度にも聞く側の学生は驚いている。学生は口々に「どの発表者についても発見があり、新鮮な驚きに心を満たされた」と語ってくれた。発表させる活動は発表する者には勿論、聞く立場の学生にも心に染みる良い影響を与えていることに指導者として改めて驚いた次第である。

また、ビブリオバトルでの「推薦図書のおすすめ文」の発表では「発表を聴いて読みたくなった本がありましたか」の問いに、「2冊以上あった」とする者が62.6%にもものぼった。このことも注目し値する点である。ビブリオバトルの標語は「人を通して本を知る。本を通して人を知る」だが、まさに「発表で読み上げられる文章」を通して学生が本を知り人を知ったと言えるからである。学生は作文し、それを人に発表することの意義を深く実感したことと思う。以上、書く活動、作文を発表する活動、発表を聞く活動は、そのいずれもが、学生たちに反省したり発見したりする材料や知的刺激に満ちた学習体験を提供したと考えられる。故に、この作文指導は有効であったと言えるであろう。

【6】 おわりに——Instruction と Scaffolding をうまく配合した授業を目指して

今回の授業を受けて、学生たちは文章の構成、文章の論理的な展開について理解を深め、自分にも作文は書けると思うと同時に、なぜ自分は今まで文章が書けなかったのか、その原因にも気付いたようである。

その気付き(noticing)を促したものはワークシートによって活性化された学生のメタ言語意識(metalinguistic awareness)だと思われる。メタ言語意識とは「自分の言語運用を客体化して眺め、その言語運用の適切性を言語使用の目的に照らして査定し、その査定に基づ

いて言語運用を再編成しようとする意識」をいう。書く前に使うワークシートはメタ言語意識を活性化させるためのツールとして機能していたと言えるだろう。

また、今回scaffoldingとしてワークシートを使うことが成功した理由は以下の点にある。

- 1) 授業の目標が明確である (800字の作文を書けるようにする)
- 2) 学生の現状と目指すレベルの差が明確である (ほとんどの学生が800字書けない)
- 3) 段階的に学習活動を配列しやすい課題である (自分史、読書感想文、論説文を書く)
- 4) メタ言語意識を活性化する工夫を盛り込みやすい学習活動である (文章の構成、論理の展開、接続表現の使い方に注意を払い、考える)
- 5) 学生同士の協議、相互評価の場面を作りやすい学習活動である (皆の前で発表し、ピア評価を受けて推敲する)

紙幅が尽きたので、いきなり結論を述べることを許されたい。我々教師は指導事項が多いと教え込み (spoon-feeding)による指導(instruction)ばかりに走りがちである。しかし、指導事項や課題の性質によっては、上で見てきたような思考支援機能を持つワークシートを用いて足場かけ支援(scaffolding)をする授業を工夫すべきだと思う。そうすれば学習者は自身の思考過程をモニターし、自分の既存の課題解決方法には何が不足していたのかを理解するようになり、その上で、その欠を補う新しい知識とスキルを習得して、支援なしで課題を解決できる自律した学習者(autonomous learner)に成長していけるからである。

筆者は英語教師であるが、日本語作文を教える機会を与えられ、上記の授業を実施して初めて自分の英語授業は instruction に偏っていたことに気付かされたのである。教師たる者科目は何であれ授業では instruction と scaffolding のバランスを考え、それらをうまく配合することを心がけるべきであると教師生活の終盤になりようやく悟った次第である。

注1：ヴィゴツキーの「発達の最近接領域(zone of proximal development)」を敷衍した。

参考文献：

石黒圭 (2008)『文章は接続詞で決まる』株式会社光文社。

樺島忠夫 1980年『文章構成法』株式会社講談社。

佐伯胖 (監修) 渡部信一 (編) (2010)『「学び」の認知科学事典』株式会社大修館

鈴木信一 (2008)『800字を書く力』祥伝社。

宮川俊彦 (2011)『これだけは知っておきたい「作文」「小論文」の書き方』

フォレスト出版株式会社。

国際教育研究所令和3年第1回理事会報告

1. 日 時：2021年5月14日（金曜日）
午前9：00～午後9：00
2. 場 所：理事各位の自宅
3. 議 長：山岸信義
4. 参加者：猪狩保昌、江口邦彦、慶山豊治、白石よしえ、瀬上和典、津田ひろみ
中西千春、山崎 勝、山本恭子、山野有紀、柳澤順一（50音図順）
5. 書 記：理事会メール会議では、交代による書記ではなく、理事会の方々の
総意を踏まえて、理事長の最終判断で、メール会議での総括をさせて
頂いた。理事会での最終的合意を得てから、全会員に理事会での審議結果
を報告させて頂いた。
6. 報 告
 - (1) 賛助会員の公益財団法人日本英語検定協会に、2021年度の賛助会費10万円のお支払いのお願い文書を、4月1日に英検協会理事長宛に送付した。
英検協会の当学会窓口となっている公益財団法人 日本英語検定協会総務部
人事・総務課の山本 香さんから、4月30日に賛助会費10万円が当学会指定の
銀行口座に振り込まれたとのメールでの連絡が、当学会の山本あゆみ会計担当への
連絡と共に、理事長にもあった。
 - (2) Newsletter 特集号が3月に発行された。多くの会員会からの投稿があり、
100ページを超える枚数となり、会員相互の交流に繋がっていくことを
願っている。
 - (3) 2021年度の会計監査の人事が未定となっていたが、当学会の新規約第8
条の6. には、「会計監査は理事長が選任し、総会において承認を得るもの
とする」と書かれている。3月27日（土）の総会では、未定であったが、その
後の理事長による交渉で、会計監査は、当研究所顧問の伊藤卓治先生に
決まった。
 - (4) 4月24日（土）に、Zoom会議による第187回月例研究会が開催された。
講師は、文部科学省 初等中等教育局 教科書調査官の池田勝久先生から
「変革と創造の時代を生きる子どもたちのために小・中・高で求められること」

のテーマで、最新情報を盛り込まれ、パワーポイントでの多くのスライドを用いて、貴重で有益なご講演を語って頂いた。当学会の会員にとっても、教育者としての良き刺激と同時に、教育者として歩むべき良き指針をお与え頂いた。16名の参加者があり、活発な質疑応答も行われ、熱気に溢れた良き月例会であった。

(4月例会の講演は、録画されているので、諸般のご事情で当日のZoom会議に参加出来なかった会員で、その録画視聴の希望者は、Zoom会議ホスト役の瀬上和典理事 (senoue82@gmail.com) に問いあわせてください。)

諸般のご事情で、4月例会講師の池田先生がご自宅からのZoomでのご発表が出来なかったため、急遽、副理事長の楊達先生にご尽力を頂き、早稲田大学のテレワークが出来る教室をご提供して頂き、そこからご講演をして頂いた。当日は、理事長代理として、元副理事長の川崎 清先生に理事長代理として、早稲田大学に出向いて頂き、講師の池田先生に当日の講師謝礼金をお渡し頂いた。

(5) 会員動向のお知らせ

①元会員で、諸般の事情で退会されていた須田和也先生（東京都公立中学校教諭）が、2021年4月より会員に復帰されました。須田和也先生の連絡先は、下記ようになります。

東京都福生市加美平3-29-1

電話：090-9107-2038 メールアドレス：SA-Kazuya0120@outlook.jp

②新会員として、石井ふみさんが、当学会の目的にご賛同頂き、会員となりました。石井ふみさんの連絡先は、下記ようになります。

自宅住所：〒252-0303 神奈川県相模原市南区相模大野4-2-5-1012

電話番号：042-765-3802 メールアドレス：fumi2000@mbg.nifty.com

(6) 総会で承認された、2021年度国際教育研究所月例研究会・年次大会実施計画案

2021年度の国際教育研究所月例研究会・年次大会実施計画案

2021年4月24日（土）第187回月例研究会（15:00～17:00）

テーマ：「変革と創造の時代を生きる子どもたちのために

小・中・高で求められること」

講師：池田勝久（文部科学省 初等中等教育局 教科書調査官）

2021年5月22日（土）第188回月例研究会（15:00～17:00）

テーマ：「英語教師が学生に日本語作文を教えてみて分かったこと」

講師：川崎 清（文京学院大学名誉教授）

2021年6月26日（土）第189回月例研究会（15:00～17:00）

【パネルディスカッション】

ファシリテーター：中西千春（国立音楽大学）

テーマ：「効果的なプレゼンテーション指導法についての考察」

1) 理論編 2) 実践篇

パネリスト：白石よしえ（近畿大学）、豊田典子（新潟医療福祉大学）

山本恭子（秀明高校）

2021年9月25日（土）第190回月例研究会（15:00～17:00）

テーマ：「二言語教育法廃止以降の米国マイノリティ言語教育政策

—ラティーノとネイティブ・アメリカンの事例を中心に—

講師：柳澤順一（芝浦工業大学工学部講師）

2021年10月23日（土）第191回月例研究会（15:00～17:00）

テーマ：「英語学習に意欲が無い生徒向けの授業方法」

—英語教育の警鐘—

講師：猪狩 愛（都立東村山高校教諭）

2021年11月27日（土）2020年度国際教育研究所年次大会案内

日時：2021年11月27日（土） 11:00～17:00

場所：早稲田大学（予定）

参加費：会員・学生（無料）、一般（1,000円）

定員：50名（先着順）

総合司会：田中慎也（国際教育研究所副理事長）

開会の挨拶：山岸信義（国際教育研究所理事長） 11:00～11:10

テーマ：「英語教育を通して人を育てる」

第1部：「講演」 11:10～11:55

講演：テーマ：「英語教育を通して人を育てる」

講師：山本新治（国際教育研究所副理事長）

昼食：12:00～13:00

第2部：「提言1」13:00～13:50

提言：テーマ「内的動機づけを重視した英語教育実践―盲学校での試み」

提言者：山岸信義（国際教育研究所理事長）

第2部：「提言2」14:00～14:50

提言：テーマ：「タスクで展開するコミュニケーション英語Ⅱの授業―日々精進する力の育成―」

提言者：山下次郎（東京都立小金井北高等学校主任教諭）

第2部：「提言3」「15:00～15:50」

提言：テーマ「心理学を活かし自主性を育てる授業実践―大学での試み」

提言者：白石よしえ（近畿大学全学共通機構 准教授）

第3部：「シンポジウム」16:00～17:00

テーマ：「心豊かな人間の成長を促す英語教育実現を目指して」

総合司会：田中慎也（国際教育研究所副理事長）

山本新治（国際教育研究所副理事長）

山岸信義（国際教育研究所理事長）

山下次郎（東京都立小金井北高等学校主任教諭）

白石よしえ（近畿大学全学共通機構 准教授）

閉会の挨拶：平見勇雄（国際教育研究所 事務局長）

（7）2020年度の総会とその後の幹部会で承認された、2021年度の役員人事

2021～2023年3月までの役員人事

名誉所長	羽鳥博愛
顧問	伊藤卓治
理事長	山岸信義
副理事長	田中慎也、山本新治、楊達
事務局長	平見勇雄
会計	山本あゆみ
理事	猪狩保昌、江口邦彦、慶山豊治、白石よしえ、瀬上和典、津田ひろみ、中西千春、山崎 勝、山本恭子、山野有紀、柳澤順一（50音図順）
会計監査	伊藤卓治

(8) 総会で承認された 2021 年度 Newsletter 巻頭言執筆者

「News Letter 第 85 号が 2021 年 6 月 26 日に発行予定」巻頭言：山本 新治

「News Letter 第 86 号が 2021 年 10 月 23 日に発行予定」巻頭言：川崎 清

「News Letter 第 87 号が 2021 年 12 月 10 日に発行予定」巻頭言：豊田典子

「News Letter 第 88 号が 2022 年 3 月 26 日に発行予定」巻頭言：瀬上和典

(9) 総会で承認された 2021 年度以降の紀要編集委員メンバー構成について

1. 【紀要第 27 号・28 号の合併号が、2022 年 3 月に発行することになった。

2. 2021 年度以降の紀要編集委員会組織と役割分担

(1)2021 年度より、津田ひろみ先生が、紀要編集企画・査読委員会担当理事に就任する事が総会で承認された。また、2021 年度以降の紀要編集委員として、下記のメンバーが総会で承認された。

(2)紀要編集委員会の役職とメンバー構成について

紀要編集委員長 田中 慎也 (元桜美林大学大学院教授)

紀要編集副委員長 白石よしえ (近畿大学准教授)

紀要編集委員 川崎 美智子 (Marie School 代表者)

平見 勇雄 (吉備国際大学教授)

中西 千春 (国立音楽大学教授)

柳澤順一 (芝浦工業大学非常勤講師)

津田ひろみ (明治大学非常勤講師)

7. 議案

(1) 2021年～2023年3月までの理事選出の件

猪狩保昌、江口邦彦、慶山豊治、白石よしえ、瀬上和典、津田ひろみ、中西千春、山崎 勝、山本恭子、山野有紀、柳澤順一（50音順）

(2) 会員参加型の運営体制強化に向けての具体的な実行に向けての提案（理事長案）

当研究所の組織・運営を明確にし、会員参加型の運営体制を築いて行く為に、現在の現状に合わせて、研究企画・運営委員会、広報・企画運営委員会、紀要編集企画・運営委員会の組織作りを検討し、具体的に機能するようにしていく。

2020年度の総会では、研究企画・運営委員会担当理事には、中西千春先生が承認されています。広報・企画運営委員会担当理事には、平見勇雄先生が承認されています。さらに、紀要編集企画・査読委員会担当理事には、津田ひろみ先生が承認されています。

総会では、これら三つの各委員会では、新年度が始まったら、各委員会の担当理事が中心となって、会員への割り当てを決めて、実際の運営に当たる事になっています。

当学会は、40人以下の小規模な会員数なので、一人で、複数の任務をお願いする結果になる事も考えられます。三つの各委員会の担当理事ともお互いに連絡を取り合いながら、会員からの協力体制を強化して頂ければと思っています。

各委員会のご担当理事には、理事長との協議も兼ねて頂き、4月～5月にかけて、具体的な各役割分担の人選を該当者ともご相談しながら、決めて頂き、具体的な活動に結びつけて頂きたいをお願いします。

1. 研究企画・運営委員会（顧問：楊達副理事長 担当理事：中西千春）

幹部会・理事会・総会では、研究企画・運営委員合での具体的な活動内容について、理事長から提案させて頂きました。部分的に出された修正意見を取り入れて、下記のように提案させて頂きます。議案としての提案ですので、率直な意見交換が出来ればと思っています。現実的で、実現可能なご提言をお願いします。

(1) 各年度の月例研究会・年次大会での具体的な計画・立案について

- ① 学会としての活動方針を明確にし、各月の月例会や年次大会での講師を出来るだけ会員の中から依頼する。
- ② 月例研究会・年次大会での会場設営や後片付けの役割分担を決める。
- ③ 月例研究会・年次大会等の案内を広報・企画委員会と連絡を取り合う担当者を決める。
- ④ 各年度の月例研究会・年次大会などの場所を特定し、月例研究会・年次大会での会場確保に努める。

(2) 創立 30 周年企画・推進と具体的な取り組みについて

- ① 創立 30 周年企画担当者を決める
- ② 創立 30 周年記念ニュースレター特集号（冊子印刷での発行）の担当者を決める
- ③ 理事長・会計と連絡を密にして、当研究所の専属となっているさいたま市にある（株）北山印刷に、創立 30 周年記念ニュースレター特集号発行依頼をする。北山印刷では、100 ページ程度で、50 冊で 5 万円ほどの予算で印刷が可能との事なので、関係者とも相談して、検討を進める。

2. 広報・企画運営委員会（顧問：山本新治副理事長 担当理事：平見勇雄）

1. ニュースレター特集号の企画と北山印刷との連絡担当者を決め、下記の任務を担当する。
 - ① ニュースレター特集号の冊子の発行
 - ② 会員へのニュースレター特集号の冊子を郵送する
 - ③ 会計担当者とニュースレター特集号発行に伴う予算を検討する
2. 紀要の PDF 版の発行を担当し、全会員にメールで紀要を送信する

3. 20冊程度の紙媒体の紀要を北山印刷に依頼し、紀要執筆者に送付する。
4. 研究所の紀要は ISSN (International Standard Serial Number、国際標準逐次刊行物番号) を取得しており、国会図書館で閲覧されているので、発行された紙媒体の紀要2部を国会図書館に送付する。
5. 大修館発行の「英語教育」の雑誌編集者に、2ヶ月前の各月の10日までに、英語教育編集者宛やその他の報道機関に、当研究所の月例会や年次大会案内の掲載を依頼する担当者を決める。

3. 紀要編集企画・査読委員会（顧問：田中慎也副理事長 担当理事：津田ひろみ）

2020年度の紀要編集企画・査読委員会として、紀要編集委員長に田中 慎也先生、紀要編集副委員長に白石よしえ先生、紀要編集委員には、明神 千代先生、平見 勇雄先生、中西 千春先生、柳澤順一先生、津田ひろみ先生に依頼する事になり、この件は、既に総会で承認されている。

1. 紀要第27号・28号合併号PDF版を2021年12月20日（月）に発行し、その合併号を、広報・企画運営委員会に依頼して、全会員に添付ファイルでのメール送信を依頼する。
2. 2021年度 国際教育研究所 紀要第27号・28号合併号応募規定を作成し、月例会や年次大会での講演者に紀要執筆依頼をする。
3. 査読者用に、査読用評価基準を作成する。紀要編集委員会では、その評価基準に基づいて、公平な審査を実施する。
4. 紀要原稿の模範となるフォーマットを作成する。
5. 査読者の名前は、紀要原稿執筆者には、分からないようにする。

「国際教育研究所の再入会者として、 思わされている事」

東京都東村山市立東村山第四中学校

主幹教諭 須田 和也

思い起こせば、24年前、私立高校の教員から公立中学校へ移動した年に授業に行き詰まり、救いを求めていたところ、たまたま『英語教育』の研修案内を見て、国際教育協議会の門を叩かせていただきました。当時は羽鳥先生を中心に現役の中高の先生方がいらして、悩みや愚痴を聞いていただき、さらにゲスト teacher の著書購入、他のテキストの購入、研修会や他の学会へのお誘いをいただき徐々にいろいろなことが改善し、充実した生活を送らせていただきました。

しかし、40代後半から両親の介護、学校では主幹教諭として勤務し、ほとんど土日の休みもなく過ごしていました。当然学会へ参加も難しくなってきました。そんな中でも、いつも山岸先生や他の先生方から暖かい言葉をかけていただき今日まで過ごさせていただいております。

今年から14年間務めた福生市から東市村山異動になりました。東村山では7校の中学校があり、そのうちの2校だけが少人数授業を今年から始めました。私の場合授業20時間、総合、道徳、道徳や他の会議を含めると週25時間（25/29マックス）持たざる負えなくなっています。本年は学習指導要領改訂に伴う評価の仕方で混乱している中、学年主任という立場で他の先生方相談を受けたり、保護者対応、生活指導、学年だより発行など、ありとあらゆる仕事に追いまわられています。毎朝5時30分起床。6時30分頃家を出ます。帰宅はほぼ毎日22時を過ぎています。時々23時を超えてしまう日も週に1、2度あります。

こんな生活ですが、少しでも良い授業を提供し、自分自身も様々な力を身に着けたいと思うようになり、この学会で勉強させていただきたく再度入会を希

望致しました。どうぞよろしくお願いいたします。

日本のバイリンガル英語教育

石井 ふみ

翻訳通訳会社フーム代表

バイリンガル英会話教室講師

バイリンガル絵本読み聞かせコーチ

元ラボ教育センター神奈川県テューター

小学校など初級英語教育から現代では導入されつつある音声学のフォノロジーを教えるのがフォニックスやチャンツである。英会話をする上で欠かせないのがヒアリングである。アメリカではフォニックスの教育で識字率が向上した。日本では松香フォニックス研究所（MPI）が現代では最も効果がある。一方、Reading Eggsというパソコン上のゲームのようなものでフォニックスを学ぶこともできるようになった。これまで6年間かけて50名近くの日本人に向けて英会話を教えてきた経験から、今の日本の英語教育にフォニックスとチャンツを加えることはとても有意義だと痛感した。英語の書く・読む・話す・聞くの四技能の中でもヒアリングとスピーキングをマスターするための音声学は、現代の日本人にとって大変困難であるが、それは逆にフォニックスを用いれば容易となる。中津療子先生の『何で英語やるの』を読み、言葉には口の形や発声訓練が重要であることも理解できた。そもそも日本語話者には英語話者のような舌の筋力や発声訓練の必要がない。こうした訓練なしに英語を話す、聞き取することは難しい。逆に言ってしまうと、中津先生のメソッドやMPIのプログラム、Reading Eggsのようなフォニックス（音の習得から文字読みを習得するメソッド）を取り入れることで、ヒアリングとスピーキングは習得することが可能となってきた。

これまでの日本の英語教育は主として、文字を書き、文法や単語の意味を覚えて、本を訳すというプロセスで行われてきている。そこに欠如してきたのが、耳で音を聞き取る、真似をした音を使ってコミュニケーションをして、初めて意味を知るといった英語での会話そのものであった。

平泉渡辺論争が70年代にあり、『諸君！』で大いに議論された日本の英語教育の義務化だったが、日本では英語教育はながらく中学一年生から学ばれてきた。これに対しての見解はさておき、日本でも小学校での英語教育義務化が始まっている。同時通訳者の鳥飼玖美子氏は『英語教育の危機』（2018年ちくま新書）

を読み、今の日本では英語教育に中途半端な期待をもたれてしまっているのではないかと懸念された。

実は、わたしは英語を日本では学ばず、逆に日本語を学ばない小学校生活を経験してきた帰国子女であったがために、こうした日本の英語教育問題にはこれまでほとんど関心を持たずに過ごしてきた。しかし、二人の子どもを2004年と2008年にそれぞれ出産し、保育者として日本で育てることになり、さて、日本語をどうやって勉強させようかと随分と頭を悩ませた。そこで、まずは「ラボ教育センター」の講師の資格を2005年に取得した。美しい日本語と美しい英語で描かれた美しい絵本をプロの朗読家が録音した音源を再生し、そのままの音を真似をして言語を獲得するというのがこちらのメソッドだ。幼子は2歳半で話し始め、日本語と英語の音をインプットし、アウトプットした。同時に漢字や音楽の譜読みなどあらゆる記号を読ませておいたところ、早期に音符と文字と音に関心を持ち出した。ただし、この発達段階の記憶は非常に早期に失われる。文字を書き始めたのは小学校の低学年であったが、漢字と譜面が読めることから、絵本だけでなく生活のあらゆる環境に存在する文字で遊ぶようになった。歌もピアノの鍵盤を弾きながら音を聞き、リズムにも親しめるようリトミックなどを幼稚園時代に親しませた。現在では、日本での集団生活を始め継続したために日本語が優勢言語である高校生（長男）と中学生（次男）となっている。劣勢言語である英語については、日本語訛りではあるものの、長文を音読し、ヒアリングとスピーキングのコツを掴んだ。こうした子育てからのバイリンガル教育と音楽教育を0歳から3歳の間に開始することには、さまざまな論議はあるものの、本人曰く「ピアノも英語も学んだ記憶がない」のだそうで、「気がつけば自分のものになっていた」という。音楽教育で有名な鈴木鎮一先生のおっしゃられる母国語教育としての日本語だけではなく、英語や音楽も環境を整えることで自然と身に付くという仮説が実証できたのである。

一昨年、私はバイリンガリズム研究をヌーシャテル大学で教えているフランソワ・グロジャン氏の著書を一冊日本語に翻訳し、現在在学中のバベル翻訳大学院の修了作品として提出した。その中では「日常生活に二つかそれ以上の言語を使う」人や学校をバイリンガルであると定義づけている。日本人の英語教師もバイリンガルに含まれる。但し、日本の小学校や中学校などの義務教育で行われている英語教育は、バイリンガル教育とは呼べるものではない。バイリンガル講師による日本人に対する第二言語習得のためのプログラムである。つまり、TESOL (Teaching English as a Second Language) の考え方が近いと思い、現在TESOLの150時間のプログラムを研修で受講した。その中では確かに英語で英文法を説明することもある。そうなると、英語で英語を教えるというメソッ

ドに近くなってしまふ。本来は日本人が英語の文法を学ぶのであれば、日本語で英文法を学ぶべきであるから、いきなり小中義務教育でTESOLを用いる教育は取り入れにくいだろうと思われる。これは、前述の鳥飼氏の著書で述べておられる英語で英語を教えることに否定的な見解と一致する。まずは日本語での思考土台をしっかりと作り上げた上での第二言語習得を目指すのが重要であると私も考えている。そうでなければ、私のように英語で思考も日本語で思考も中途半端なセミリンガルであった時期に苦しむことになりかねないため、バイリンガル教育は中途半端に行うべきではないと考えている。また、海外帰国子女が現地校（日本に帰国した際）に経験する言語が通じないという言語認知心理学を今後は注意して研究しておかないといつまでたっても越えられない言語の壁が生じることとなる。

これまでの日本は翻訳大国であった。日本ほど翻訳出版が盛んな国はなかなかないそうだ。日本人は諸外国の文化や言語をトランスフォーム（翻訳）して自国の文化や言語に容易に取り入れる。その結果、日本語は豊かになり、日本文化は常に変化し続けてきた。文明開化を見ても明らかだ。その柔軟な適応力は世界に類を見ない。興味深いことだが、フランスでは「タタミゼ」効果というものがあるらしい。日本語や日本文化に影響を受けたフランス人が、日本人らしさを「タタミゼ」と呼ぶ。そういえば例えば「お互い様」のような、日本語独自の文化が言語習得には伴うものである。日本語にはあるものが、多言語に翻訳をすると失われることもある。私の考える英語を学ぶことは、そういった自国の言語や文化にあるものを、いかにして外国語の中に同じ価値を見つけ出して、相手に伝えらるかという技術を身に着けるためにある。そのためにも、私たちは人間として早い段階から複数の言語、そして音楽や美術などの文化に触れる必要があるのではないか。そしてそれを比較することによる自国の言語や文化への関心を高めて、自己のアイデンティティを軸としてマイノリティ、マジョリティ関係なく世界中の人たちと交流できる人間の育成をしていきたい。

最後に英語と日本語を操る人として、通訳の現場や翻訳の技術を磨くことによって、多くの人たちを助ける仕事に就き、自分の能力を生かすことができた。たとえその分野には詳しくなかったとしても、通訳者や翻訳者は（教育者もそうだと思うが）調べ物をとことんすることで人の役に立つことができる。インドでは国民の多くが英語を第二言語として習得したことによって、していない時とは比べ物にならないほど収益が上がった。インド語も日本語と同じく、英語とは文法が大きく異なる。そのため日本でも『インド式英会話』という第5文法までを簡略化して話す・使う術が数年前から流行り出している。自分の意見

や感情を表に出さない日本の国民性を、このインド式はとてもよく理解していて、例えばSound系の動詞を使って、A=Bの構文を使い、自分の意見を伝える。「その価格は高すぎる“*That price sounds too high*”」など、交渉の場で英語を使うためのものである。それを次にFind系と呼ばれる文型で私がAをBと思う“*I find that price too high*”という英文でも表現ができる。最後に、Give系であるが、これはAは私にBを与える“*That price gives me a high image*”などと構文を変化させていく。簡単に説明するとそんな感じだが、ぱっと瞬間に英語で意見を言えるので、これほど便利な物はないと生徒たちにも教えてきた。

総じて、私の英語教育は口の形をフォニックスで作り、音を聞いて声に出せるよう訓練を繰り返すと同時に、インド式のような簡易な英語で意見を伝えて、自分のことを知ってもらえるようにすることを大切にしていた。そして、幼少期から英語に触れていなくても、大人になってからでもバイリンガルになることは可能であり、少しの訛りがあっても、バイリンガルであることには違いがない。優勢言語と劣勢言語がバイリンガルには常に伴うのは普通である。そういった新しい時代の常識がますます日本にも浸透して欲しいと思う。

令和3年6月19日
石井ふみ

編集後記

私の住んでいる四国は観測史上もっとも早い5月15日より梅雨に入りました。このところ、しばらくは空梅雨でしたが、またそろそろ梅雨らしい天気になり始めました。

私の大学は今週から対面授業になりました。ゴールデンウィーク明けは帰省する学生のため大事をとって10日間オンライン授業となっていました。それから感染者が大幅に増え5月31日まで延長。さらに6月20日まで再延長となり、私は約2ヶ月近く在宅勤務となりました。こんなことは就職して初めて。そのためすっかり出不精となり、本来の調子を忘れてしまっています。早いうちに通常に戻りたいですが東京ではまた感染者が増えつつあります。都会で増えると地方にも広がっていくのでまたオンラインに戻らないかとうやく始まった対面授業なのに心配しながらの勤務です。

今回もいい原稿が集まりました。投稿していただいた会員の皆様、本当にありがとうございました。

コロナのワクチン接種が行き渡り、早く対面で皆様とお会いできる日が待ち通しいです。

(文責 平見勇雄)